

2020年1月30日

私立大学図書館協会
国際図書館協力委員会
委員長 御園 和之 様

2019年度私立大学図書館協会海外認定研修参加報告書
—台湾図書館研修—

研修期間：2019年12月4日（水）～12月7日（土）

獨協大学図書館
高島 豊

目 次

I 訪問機関

I -1 台北市立図書館総館	2
I -2 国立政治大学達賢図書館	2
I -3 国家発展委員会檔案管理局	3
I -4 中華飲食文化図書館	4
I -5 国立台湾図書館	4
I -5-1 台湾図書館病院	4
I -5-2 台湾学研究センター	4
I -6 国立台湾大学図書館	5
I -6-1 辜振甫紀念図書館	5
I -6-2 本館図書館	6
I -6-3 自動書庫棟	6
I -6-4 校史館	6
I -7 その他	7
I -7-1 コンビニ内児童閲覧室	7
I -7-2 無人図書館	7
II 研修全体を通しての特記事項	7

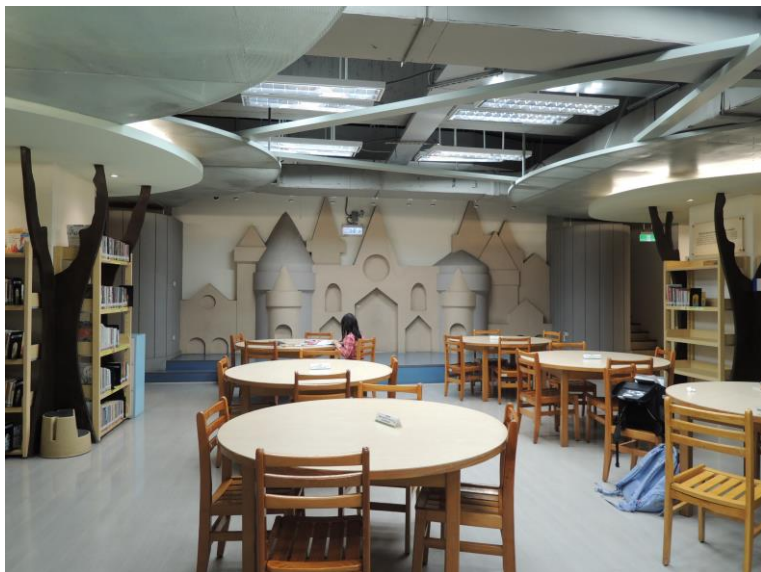
標記研修について、訪問機関順に研修内容を報告いたします。

I 訪問機関

I-1 台北市立図書館総館

図書館長の洪世昌氏からの紹介：「台北市立図書館は、台北市民 260 万人をサービス対象者とする台湾で最大の市立図書館。重点項目は様々な年齢層に合わせた支援や、外国人や障害者など特別な支援を必要とする利用者のサポートである。市民からの声の集約にも努めている。」

館内の主な利用ゾーンを見学した際に特に印象に残った場所は、高齢者が生き生きと活動していた生涯学習支援センター、国旗やイラストを飾ったり、多言語の利用ガイドを配布したりするなど、外国人が親しめる工夫が目をつけた多元文化資料センター、親子ブースが多くあったり、毎日映画会が行われていたりする視聴覚フロアなど。乳幼児から小学生が対象の小小世界外国語図書館では、細かい年齢層別の多言語の蔵書や、壁いっぱいに描かれた



(小小世界外国語図書館の児童閲覧室)

人気絵本作家ジミー（幾米）のイラスト画など、子供たちが使いやすく親しみを感じる空間づくりが随所に見られ、外国人も含めた子供の読書推進への愛情と熱意が感じられた。

I-2 国立政治大学達賢図書館

中国の南京国民政府学校を前身とした人文科学系総合大学の達賢図書館は、2019 年 11 月に試験運用を開始したばかりの中央図書館。館長の陳志銘氏からの紹介：「達賢図書館は、最新のハイテクを導入した広いスペースで学生が専攻分野に関わりなく多様な学習が自由にできる環境を提供している。また、充実した蔵書の国民党や中国近代史の関連資料のデジタル化を進めている。図書館の新設は、図書館の名称にもなっている司徒達賢氏（卒業生）をはじめ、多くの寄附金で賄われた。」

質疑応答では、学生が制作した図書館紹介動画を図書館 HP に載せ、学生目線の図書館を紹介するなど、学生との協働も行われていること、電子資料の購入予算を多く取り、毎年の値上がりにも対応していること等の話があった。

館内の主な利用ゾーンの見学では、BGM が流れる閲覧席と書架エリアを持つ視覚的にも壮観な巨大な吹抜け、ハイテク機器が揃い制作の様子や作品を見た「メーカースペース」、スタジオで視聴覚メディアの制作ができる視聴覚エリア、用途に応じた多くの共同作業スペースと開放的な発表用スペースがあり、プレゼンやパフォーマンスなどを行う環境が整っているアクティブラーニング/ラーニングコモンズなどが印象に残った。ハイテクを駆使した学習サポート体制は想像を上回る充実した内容で、恵まれたスペースを使い、快適な滞在型図書館として優れた機能を有していた。

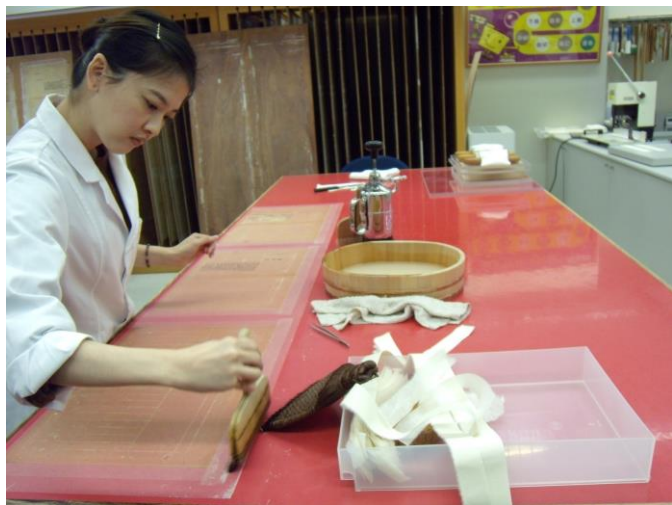


(図書館全体が巨大な吹抜け構造となっている達賢図書館)

I-3 国家発展委員会檔案管理局

台湾の公文書を一括して取り扱うために 2001 年に設立された国の機関。最も重要な使命は膨大な公文書のアーカイブ化で、年間約 150 万件の資料をデジタル化している。

資料の状態をチェックして、媒体に合った方法でオリジナルの状態に近づける修復作業は根気、技術、時間を要する。「劣化が激しく現代の技術では修復不能な資料は将来に希望を託して保管しておく。」



(檔案管理局内での資料修復作業)

という話から、国家の重要な資料を次世代へ受け渡す責任感と使命感が伝わった。

I-4 中華飲食文化図書館

台湾ソウルフードを国際的に展開する三商企業が、台湾の食文化研究促進のために設立した食に関する専門図書館。張玉欣館長から、歴代の台湾総統が外国からの賓客に台湾や台湾先住民の料理を供したことを紹介しつつ、台湾の食文化を継承し、広める図書館の重要性について話があった。各言語の資料が混配され、特定の主題に関する資料を多言語間で見渡せる排列で、日本語の資料も多く所蔵していた。

I-5 国立台湾図書館

日本統治時代の1914年に設立された台湾総督府図書館を前身とする台湾で最も歴史のある国立図書館。公共図書館（1～4階）と、台湾学研究や資料の修復などを専門的に扱う専門図書館（5～6階）に分かれており、研修では後者を見学した。

I-5-1 台湾図書病院

日本統治時代の創設当初から続く資料修復室。材料や道具の説明を受けながら、極力オリジナルの状態に修復する作業を見学した。作業を担うのは研修を受けたボランティアが殆どで、労力と技術を要する仕事に無償で取り組む意義を伺うと、「興味と、やり終えた時の達成感。」という答えに、多くの善意と情熱に支えられていることを実感した。

I-5-2 台湾学研究センター

日本統治時代の資料の世界最大の蔵書を有し、近年は納本制度により台湾関連の資料を網羅的に収集し、内外の台湾研究や教育を支援する専門図書館。

案内役の蔡蕙頻さんの話：「台湾は歴史上様々な国の支配下に置かれ、台湾独自の歴史教育が欠落していたが、近年の台湾人意識の高まりで1990年に「認識台湾」という教科が学校カリキュラムに採用された。当センターはこうした教育支援にも重点を置いている。台湾人は日本に対して、歴史を背景として「親日」と云うよりお互いが理解し合い友好を深める「友日」を望んでおり、両国間の理解が深ま



(ボランティア職員による資料修復)

るような仕事をして行きたい。」

ボランティアも含めて職員のモチベーションの高さや情熱には圧倒的なものがあり、こうした思いが結集することで大きなプロジェクトが動くということを認識した。

I-6 国立台湾大学図書館

台湾大学は日本により 1928 年に設立された台北帝国大学を前身とし、学生数 3 万人、50 以上の学部を擁する総合大学。大学の 7 つの図書館のうち 4 館を見学した。最後に見学した校史館では図書館長の陳光華氏による台湾大学図書館についてのレクチャーと、丸善雄松堂の中村光志氏による日本の大学図書館についてのレクチャーが行われた。中村氏からは、研修参加者が所属する大学図書館（西南学院大学図書館、立命館大学図書館、獨協大学図書館）についての紹介もあった。以下は、訪れた 4 つの図書館の報告。

I-6-1 辜振甫（コ シンポ／グー チェンブー）記念図書館

3 つの学部図書館/図書室を統合する形で 2013 年に竣工。図書館名に冠された辜振甫氏をはじめとする卒業生の寄附で建てられた。フロアを森に見立て、樹木、木漏れ日、森の小道など、利用者は「森」の中のお気に入りの場所を見つける感覚で過ごす。書架や閲覧席には台湾産の竹が使われている。



(辜振甫記念図書館 1F)

I-6-2 本館図書館

1998年に新設された中央図書館。日本統治時代の初代図書館（現在の校史館）の雰囲気を踏襲した外観や5階まで吹抜けのエントランスなどが風格を感じさせた。館内は高級感ある木製の書架や閲覧席が余裕をもって配置され、広々とした印象。特別コレクション閲覧ゾーンでは蔵書の一部（レプリカ）が展示され、AR技術で説明や画像が見られる資料もあった。日本関係の資料も多く、和書保管庫も設けられていた。

廊下を利用した持込みノートPC利用のための”e-corner”や24時間自習室など、時代と共に変化する学生のニーズに即した場の創設も充実していた。特に印象に残ったのは、台湾大学関係者の資料が収められた「台大人文庫」。壁面が書架で覆われ、洋風書斎をイメージした重厚で落ち着いた品格を備えていた。学生に一番人気があるとのこと。



(台大人文庫)

I-6-3 自動書庫棟

2018年10月に運用を開始した台湾で初の自動化書庫。120万冊収容可能。センター内には個人閲覧席とグループ閲覧室がある。

I-6-4 校史館

台北帝国大学創設翌年の1929年に竣工し、増築を経ながら1998年の新本館竣工まで中央図書館として使われていた。現在は台北市の古跡として保存・一般公開されている。



(旧中央閲覧室を改装した校史館2階ホールでレクチャーが行われた)

I-7 その他

研修最終日にコンビニ内児童閲覧室と、空港内にある無人図書館を見学した。

I-7-1 コンビニ内児童閲覧室

台北市立図書館が行っているコンビニでの図書受取返却サービスの一環として、店内の一角が仕切られて子供用の机、椅子、本棚が置かれていた。

I-7-2 無人図書館

市の財政難対策とサービス向上のために開設され、市内に8か所ある。台北市立図書館訪問時に「無人図書館での資料の盗難は非常に稀で心配はない。」という館長の言葉を思い出し、台湾人の民度の高さを改めて感じた。



(セブンイレブン内に設けられた児童閲覧コーナー)

II 研修全体を通しての特記事項

① 寄附の大きさ

見学した新しい大学図書館が寄附金で殆ど賄われて建てられたのは驚きだった。東日本大震災の際、台湾からの義援金が世界でも突出していたことから伺えるが、台湾には必要なもののために力を惜しまない文化がある。寄附の多くは卒業生からのもので、在学時に受

けた支援への恩返し、還元という意味もあろう。教職員と学生の絆の強さも感じられる。

② スタッフの献身的な姿勢から生まれる質の高いサービス

ボランティアの献身的な資料修復作業、公共図書館での社会的弱者に対する手厚い支援、専門図書館での台湾の歴史や文化を後世に正しく伝えようとする熱意など、接した人たちは誰もが課題について熱く語り、その成果を紹介してくれた。これには、台湾が歴史のなかで生まれ、近年注目されている「台湾人アイデンティティ」が原動力になっていると感じた。

③ 利用者にとっての快適な場

図書館は新しくて費用をかけるほど快適な場として充実することは当然だが、特に大学図書館では、本に囲まれ格調があり、アカデミックな雰囲気が漂う空間が好まれると感じた。

書架に囲まれた洋風書齋風の台大人文庫（台湾大学）が学生に一番人気であり、達賢図書館（政治大学）で最も目を見張る空間は、書架が取り囲む巨大な吹抜けで、学問の府であることが強く印象付けられた。筆者が過去に訪問したウィーン大学図書館の古い大閲覧室や、ドレスデン工科大学図書館の新しい大閲覧室等も共通する雰囲気を持っていた（2015年度海外認定研修A報告書参照）。

最新の機器や設備は新しいものが出てくれば魅力を減らすのに対し、学術的な気分が喚起される場所は時代を超えて「居心地の良い場所」「勉強がはかどる場所」として好まれることは、図書館の場所作りに参照すべきだと感じた。



(参考：ウィーン大学図書館 大閲覧室)

以上